

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 25 日現在

機関番号：20105
 研究種目：基礎研究（C）
 研究期間：2010～2012
 課題番号：22592555
 研究課題名（和文）「閉じこもり」高齢者のスクリーニング尺度の作成と訪問介入プログラムの開発
 研究課題名（英文）Development of a screening scale and a home-visiting intervention program in homebound elderly
 研究代表者 坂倉 恵美子（SAKAKURA EMIKO）
 札幌市立大学・看護学部・教授
 研究者番号：10292038

研究成果の概要（和文）：

本研究では、A 地域在住高齢者の閉じこもり予防のために健康と生活の実態を明らかにすることを目的とする「閉じこもり高齢者のスクリーニングと訪問型介入プログラムの開発」を実施した。23 年度は、季節別にみた地域高齢者の外出頻度と精神健康の調査を実施した。その結果、精神健康が良好な人は日常生活を元気に過ごしており、冬期間の外出行動の意識は、高齢であること、経済状態が充分でないこと、主観的健康感が低い人は閉じこもり傾向を示した。24 年（最終年）は、個人回想法を用いた訪問型介入を実施した結果、概ね良好なる効果を認めた。

研究成果の概要（英文）：

This study consisted of a screening survey and a home-visiting intervention program among homebound elderly. In 2011, we surveyed seasonal variations in going-out behavior and mental health of community-dwelling elderly citizens. Persons with better mental health demonstrated higher QOL. Persons of older age, in poorer financial situation, with worse subjective health tended to go out less frequently in winter. In 2012, we performed home-visiting life-review intervention that demonstrated some positive effects on the psychological well being of the subjects.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|---------|-----------|---------|-----------|
| 2010 年度 | 600,000 | 180,000 | 780,000 |
| 2011 年度 | 800,000 | 240,000 | 1,040,000 |
| 2012 年度 | 1,700,000 | 510,000 | 2,210,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 3,100,000 | 930,000 | 4,030,000 |

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：地域・老年看護学

キーワード：地域看護学

1. 研究開始当初の背景

わが国の介護保険制度は、予防重視型に改正され、介護予防活動が盛んに行なわれてい

る。しかし、高齢化現象は地方過疎地域以上に都市部の高齢化が懸念されている。都市部では、地域でのネットワークが著しく希薄であ

り、閉じこもりや社会からの孤立、ひいては孤独死を発生させている。このような状態にある高齢者は、居住地域においてサポートを必要としても得られない特性を有しているが、日常的に近隣住民との交流が少なく、外出頻度、誰と食事を取るかなど生活のありかたを考慮した「閉じこもり」高齢者のハイリスク調査および検証は少ない（池野ら,2008）。

都市在住高齢者の基礎調査から、「閉じこもり」傾向にある高齢者のスクリーニング尺度の開発を検証し、次に学生参加型の訪問介護介入プログラムを実施し、その開発の効果を明らかにする。

2. 研究の目的

本研究の目的は、予防重視型介護保険制度実施後の都市型在住高齢者の基礎調査から、「閉じこもり」ハイリスク高齢者のスクリーニング手法の作成と訪問型介入プログラムの開発と効果を検証することである。

3. 研究の方法

23年度は地域在住高齢者の「とじこもり高齢者」のスクリーニング調査を実施した。

研究代表者によるこれまでの実践研究成果を評価し、札幌市内A地区75歳以上高齢者を対象に調査実施計画を完成する。これまでに筆者は、積雪寒冷地域に居住する高齢者65歳以上を対象とし、研究協力の同意が得られた方を対象とし、以下の調査を実施した。質問調査は、基本属性（年齢、性別、世帯構成、居住環境、居住年数、経済状態）、社会状況、健康指数、疾患、日常生活動作、外出頻度、受療状況、転倒恐怖感（fear of falling）、主観的幸福感（改正版PGCモラルスケール）である。

24年度は訪問回想法の実施を実施した。その目的を次に述べる。回想法は、高齢者の自尊心および人生満足度を維持し、あるいは改善に有用な看護介入であるが、回想法効果を測定することは難しいことである。「閉じこもり」になり得る高齢者を対象として個人回想法（Life Review）を用いた訪問型介入事業を実施し、高齢者の活力を取り戻す効果を検証することを目的とした。

23年度調査研究

(1) 対象者：北海道S市A区で実施。公的機関の承認を得て、住民基本台帳から300人を無作為抽出し、調査協力依頼と自記式質問紙調査票を郵送した。そのうち、175人から返送され（回収率58.3%）、有効回答率163人（93.7%）であった。調査期間は平成24年1月～2月であった。

(2) 調査方法：

A区基本台帳により、A区在住75歳以上の高齢者500名を無作為に抽出する。抽出した対象者に、アンケート調査依頼文、無記名式の質問紙と返信用封筒を郵送する。記入後同

封の返信用封筒にて返送してもらう。

対象者が自分で回答できない場合（入院中、病気／障害などの理由により）は、代筆者に回答していただく。

(3) 調査内容

質問項目は基本属性、老健式活動能力指数（ADL）、精神的健康（GHQ-12）、QOL（PGCモラルスケール）、ソーシャルサポート（MOSS-E）、季節別（夏季および冬季間）の外出行動意識である。

24年度調査の実施

(1) 対象者：札幌市A区の在宅高齢者の「閉じこもり」ハイリスク高齢者の抽出の結果、協力要請後承諾を得た8人を対象とした。

(2) 介入プログラム：

①実施時間・回数・間隔；週1回程度、1回60分の調査を5週に渡り、計5回を実施。

②回想方法；研究者が事前に用意した回想を促す以下6項目のテーマから成る半構成的面接によって自由な語りを促し、ICレコーダーで録音した。

回想法の導入：健康状態の質問、児童期と青年期：学校には行かれましたか、青年期：一番楽しかったことはなんですか、成人から壮年期：20代のときから現在まで最も重要だった出来事はなんですか、壮年期：人生の中で願っていたことをこれまでになさったと思いますか、まとめ：総じてどんな人生を送っていたらと思いますか、であった。

③効果評価；実施前・後の2回、アンケートと半構造化面接により、効果測定を実施した。実施前後ともアンケートは、インタビュー時に合わせて聞き取るためその場で回収した。介入実施前後にGHQ精神健康調査票、主観的幸福感LSIK、外出に対する自己効力感から構成される質問紙調査を実施した。

④分析方法：インタビュー情報を逐語録に書き起こし、SCAT（steps for coding and theorization）法を用いて分析した。SCATは四つのステップでテキストの抽象度を高め、テーマの構成概念いわゆるコードを作成し、ストーリーラインを構成するものである。

4. 研究成果

(1) 23年度の研究成果を以下に述べる。

対象者は、参加希望8名であったが、最終まで実施できた6名を分析対象とした。参加者は男性2名、女性4名であった。平均年齢は 81.83 ± 5.67 歳であり、全員が疾患を有し、子供のいる者3名、自立歩行ができるもの4名、外出する主なる目的は、通院4名、デイケア1名、買い物3名、趣味1名であった。GHQ下位尺度の平均と標準偏差を回想法による介入の前後で示すと、身体症状；事前 16.00 ± 2.16 ・事後 15.17 ± 5.15 、不安と睡眠；事前 12.17 ± 1.77 ・事後 13.00 ± 2.16 、精神的不調；事前 12.17 ± 1.77 ・事後 $13.00 \pm$

2.16, 抑うつ状態; 事前 13.50±5.62・事後 12.83±5.40 であった。LSIK 総得点の平均と標準偏差は, 事前 4.50±1.50・事後 4.17±1.21 であった。外出の自己効力感の総得点の平均と標準偏差は, 事前 2.67±0.29・事後 2.69±0.33 であった。

(2) 24 年度の研究成果を次に述べる。調査の最終回まで研究協力が得られた男性 2 名, 女性 4 名を分析の対象とした。平均年齢は 81.8±5.7 歳で, 全員が独居であり何らかの疾患を有していた。介護認定審査の判定は 2 名が「非該当」, 4 名は「要支援 2」であった。SCAT による分析の結果, 43 のサブコードから 7 つのコードが抽出された。対象者は, 【今なお残る戦争の傷跡】, 【かけがえのない家族への思い】, 【培われてきた信念と自己価値】, 【生活の再構築】, 【健康への関心および支援への期待と失望】, 【他者との交流を望む思い】, 【人生への満足に基づく死の準備】について語った。

ベースライン調査としてスクリーニング調査の実施した結果, 先行研究(入内島・青木, 2002)と同様に, 精神的健康が高い人ほど, QOL が高くなるという傾向を認めた。また, ADL が良い人ほど, QOL が高くなるという傾向がみられた(前田, 1979)。外出行動意識という点では, 年齢が高い, 経済状態が悪い人ほど季節に健康や行動が影響を受けていると感じており, 日常の外出行動の頻度も低い傾向があった。また, QOL が高い人やソーシャルサポートの提供が多いほど, 季節に健康や行動が影響を受けていないと感じており, 日常の外出行動の頻度が高い傾向にあった。本研究の結果から今後の介入方法としては, 精神的健康もしくは生活満足度を高める方法が有効であることが示唆された。訪問型介入プログラムの実施において対象者の精神的健康, 主観的幸福感, 外出の自己効力感, 個人回想法の介入前後で変化を認めなかった。介入前後で各尺度得点が増加した参加者と減少した参加者がおり, サンプル数が少ないため, 影響が相殺されたことが反映している。併しながら, 後期高齢者である対象者は, エリクソンの発達段階の理論に合致する人生の歩みを生き活きと想起した。すなわち, 自らのアイデンティティの確立や信念, 家族への思い, 健康, 他者との交流, 死の準備などについて語るにより自らの人生を肯定的に振り返っていた。個人回想法(Life Review)は, 近い将来に「閉じこもり」の状態となり得る後期高齢者の活力を取り戻すための手法として有効である可能性が示唆された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

・坂倉恵美子, 原井美佳, 進藤ゆかり, 片山めぐみ, 村松真澄, 中村恵子: 特別豪雪地帯に居住する高齢者の主観的幸福感に関する研究—人生の振り返りについての分析—, 札幌市立大学研究論文, 平成 23 年 3 月

[学会発表] (計 8 件)

① Sakakura Emiko, Masumi Muramatsu, Mika Harai, Youichi Maki: Relations between frequency of going-out by season and mental health and subjective well-being among community-dwelling elderly people in special heavy snow areas. International Collaboration for Community Health Nursing Research(ICCHNR), 25 年 3 月 (in: Edinburgh)

② 坂倉恵美子, 村松真澄, 原井美佳, 榎洋一; 積雪寒冷地における地域在住高齢者の季節別に見た外出頻度, 第 32 回日本看護科学学会, 平成 24 年 12 月, 東京

③ 坂倉恵美子, 村松真澄, 原井美佳, 榎洋一: 積雪地における地域在住高齢者の季節別外出頻度の実態と関連要因の検討, 第 71 回日本公衆衛生学会総会, 平成 24 年 10 月, 山口

④ Emiko Sakakura, Masumi uramatsu, Mika Harai: Relationships between Subjective well-being and Subjective oral health of the user of Elderly Citizens' Welfare Center, The 9th International Conference of the Global Network of WHO, 平成 24 年 7 月, 神戸

⑤ Emiko Sakakura, Masumi Muramatsu, Mika Harai: Development of an intervention program for mental promotion among the elderly living in snowy areas with severe climate, in Community Health Nursing Research, 平成 24 年 5 月 (in Alberta)

⑥ 坂倉恵美子, 原井美佳, 進藤ゆかり, 片山めぐみ, 村松真澄, 中村恵子: 特別豪雪地帯に居住する高齢者の主観的幸福感に関する研究—人生の振り返りについての分析—, 第 14 回日本地域看護学会, 平成 23 年 7 月, 神戸

6. 研究組織

(1) 研究代表者

坂倉 恵美子 (SAKAKURA EMIKO)

札幌市立大学・看護学部・教授

研究者番号：10292038

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者

岸 玲子 (KISHI REIKO)

北海道大学・医学(系)研究科(研究院)・教授

研究者番号：80112449

池野 多美子 (IKENO TAMIKO)

北海道大学・医学(系)研究科(研究院)

・研究員

研究者番号：80569715

村松 真澄 (MURAMATSU MASUMI)

札幌市立大学・看護学部・准教授

研究者番号：50452991

原井 美佳 (HARAI MIKA)

札幌市立大学・看護学部・講師

研究者番号：80468107